

大きなかに

小川未明

青空文庫

それは、春の遅い、雪の深い北国の話であります。ある日のこと太郎は、おじいさんの帰ってくるのを待つていました。

おじいさんは三里ばかり隔たった、海岸の村へ用事があつて、その日の朝早く家を出ていったのでした。

「おじいさん、いつ帰ってくるの？」と、太郎は、そのとき聞きました。

すつかり仕度をして、これから出てゆくとしたおじいさんは、につこり笑つて、太郎の方を振り向きながら、

「じきに帰ってくるぞ。晩までには帰ってくる……。」といいました。

「なにか、帰りにおみやげを買ってきてね。」と、少年は頼んだのであります。

「買ってきてやるとも、おとなしくして待っているよ。」と、おじいさんはいいました。

やがておじいさんは、雪を踏んで出ていったのです。その日は曇った、うす暗い日でありました。太郎は、いまごろ、おじいさんは、どこを歩いていられるだろうと、さびしい、そして、雪で真っ白な、広い野原の景色などを想像していたのです。

そのうちに、時間はだんだんたってゆきました。外には、風の音が聞こえました。雪が霰が降ってきそうに、日の光も当たらずに、寒うございました。

「こんなにてんき天氣わるが悪いから、おじいさんは、お泊とまりなさるだろう。」と、家うちの人ひとたちはいつていました。

太郎たろうは、おじいさんが、晩ばんまでには、帰かえつてくるといわれたから、きつと帰かえつてこられるだろうと堅かたく信しんじていました。それで、どんなものをおみやげに買かつてきてくださるだろうと考かんえていました。

そのうちに、日ひが暮くれかかりました。けれど、おじいさんは帰かえつてきませんでした。もうあちらの野原のほらを歩あるいてきなさる時じぶん分ぶんだろうと思おもつて、太郎たろうは、戸口とぐちまで出でて、そこにしばらく立たつて、遠とおくの方ほうを見みていましたけれど、それらしい人影ひとかげも見みえませんでした。

「おじいさんは、どうなさったのだらう？ きつねにでもつれられて、どこへかゆきなされたのではないかしらん？」

太郎は、いろいろと考^{かん}えて、独^{ひと}りで、心^{しん}配^{ぱい}をしていました。

「きつと、天^{てん}氣^きが悪^{わる}いから、途^{とち}中^{ゆう}で降^ふられては困^{こま}ると思^{おも}つて、今夜^{こんや}はお泊^とまりなさつたにちがいない。」と、家^{うち}の人^{ひと}たちは語^{かた}り合^あつて、あ^あまり心^{しん}配^{ぱい}をいたしませんでした。

しかし太郎^{たろう}は、どうしても、おじいさんが、今^{こん}晩^{やと}泊^とまつてこられるとは信^{しん}じませんでした。

「きつと、おじいさんは、帰^{かえ}つてきなさる。それまで自^じ分^{ぶん}は起^おきて待^まっているのだ。」と、心^こに^こきめて、暗^{くら}くなつてしまつてからも、その夜^よにかぎつて、太^た郎^{ろう}は、床^{とこ}の中^{なか}へ入^{はい}つて眠^{ねむ}ろうとはせず

に、いつまでも、ランプの下したにすわって起きていたのです。

いつもなら、太郎は日が暮ひれるとじきに眠ねむるのでしたが、不思議ふしぎに目がさえていて、ちつとも眠ねむくはありませんでした。そして、こんなに暗くらくなつて、おじいさんはさぞ路みちがわからなくて困こまつていなさるだろうと、広い野原ひろのはらの中で、とぼとぼとしていられるおじいさんの姿すがたを、いろいろに想像そうぞうしたのでした。

「さあ、お休みやすみ、おじいさんがお帰りかえになつたら、きっとおまえを起おこしてあげるから、床とこの中なかへ入はいつて、寝ねていて待つておいで。」と、お母かあさんがいわれたので、太郎は、ついにその気きになつて、自分の床じぶんのとこにはいつたのでありました。

しかし、太郎たろうは、すぐには眠ねむることができませんでした。外そとの

くらそら
暗い空を、吹ふいている風かぜの音おとが聞きこえました。ランプの下したにすわ
つているときも聞きこえた、遠とおい、遠とおい、北きたの沖おきの方ほうでする海うみの鳴な
る音おとが、まあくらに頭あたまをつけると、いっそうはつきりと雪ゆきの野原のほらの
上うへを転ころげてくるように思おもわれたのであります。

しかし、太た郎ろうは、いっつのまにか、うとうととして眠ねむつたのであ
ります。

彼かれは、朝あさ起おきると、入いり口ぐちに、大おおきな白しろい羽はねの、汚よごれてねずみ
いろになつた、いままでにこんな大おおきな鳥とりを見みたこともない、鳥とりの
死しんだのが、壁しとみ板いたにかかつていいるのを見みてびつくりしました。

「これはなに？」と、太た郎ろうは、目めを円まるくして問といました。

「これかい、これは海うみ鳥どりだ。昨ゆうべ夜べ、おじいさんが、この鳥とりに乗の

つて帰かえつてきなすつたのだ。」と、お母かあさんはいわれました。

おじいさんが帰かえつてきなすつたと聞きいて、太郎たろうは大おお喜よろこびで
 ありました。さつそく、おじいさんのへやへいつてみますと、お
 じいさんは、にこにここと笑わらつて、たばこをすつていられました。

それよりも、太郎たろうは、どうして、海うみどり鳥どりが死しんだのか、聞ききた
 かったのです。その不ふ審しんが心こころにありながら、それをいい出だす前まえに、
 おじいさんの帰かえつてきなされたのがうれしくて、

「おじいさん、いつ帰かえつてきたの？」と問といました。

「昨夜ゆうべ、帰かえつてきたのだ。」と、おじいさんは、やはり笑わらいなが
 ら答こたえました。

「なぜ、僕ぼくを起おこしてくれなかつたのだい。」と、太郎たろうは、不ふ平へい

に思おもつて聞ききました。

「おまえを起おこしたけれど、起おきなかつたのだ。」と、おじいさんはいいました。

「うそだい。」と、太郎たろうは、大おおきな声こゑをたてた。

すると、同どう時に、夢ゆめはさめて、太たろう郎は、床とこの中なかに寝ねているのでした。

おじいさんは、お帰かえりなされたろうか？ どうなされたろうか？

と、太たろう郎は、目めを開あけておじいさんのへやの方ほうを見みますと、まだ帰かえられないもののように、しんとしていました。

太たろう郎は、小しょう便べんに起おきました。そして、戸とを開あけて外そとを見みま

すと、いつのまにか、空そらはよく晴はれていました。月つきはなかつたけ

れど、星影ほしかげが降ふるように、きらきらと光ひかつていました。太郎は、もしや、おじいさんが、この真夜中まよなかに雪道ゆきみちを迷まよつて、あちらのひろの広野をうろついていなさるのではなからうかと心配しんぱいしました。そして、わざわざ入り口ぐちのところまで出でて、あちらを見みたのであります。

いろいろの木立こだちが、黙だまつて、星晴ほしばれのした空そらの下したに、黒くろく立たつていました。そして、だれが点ともしたものか、幾いく百ほん本ぽんとなく、ろうそくに火ひをつけて、あちらの真まつ白しろな、さびしい野原のほらの上うへに、一面めんに立たててあるのです。

太郎たろうは、きつねの嫁入よめいりのはなしを聞きいていました。いまあちらの野原のほらで、その宴えんかい会ひらが開ひらかれていたのでないかと思おもいました。

もし、そうだったら、おじいさんは、きつねにだまされて、どこへかいつてしまいなされたのだろうと思つて、太郎は、熱心に、あちらこちらの野原の方を見やっていました。

ろうそくの火は、赤い、小さな烏帽子のように、いくつもいくつも点つていたけれど、風に吹かれて、べつに揺らぎもしませんでした。

太郎は、気味悪くなつてきて、戸を閉めて内へ入ると、床の中にもぐり込んでしまいました。

ふと太郎は、目をさましますと、だれかトントンと家の戸をたたいています。風の音ではありません。だれか、たしかに戸をたたいているのです。

「おじいさんが、帰かえつてきなすつたのだらう。」と、太郎たろうは思おもいました。また、先刻さつき、野原のはらに赤あかいろうそくの火ひがたくさん点ともつていたことを思おもい出だして、もしやなにか、きつねか悪魔あくまがやってきて、戸とをたたくのではなからうかと、息いきをはずませて黙だまっていました。

すると、この音おとをききつけたのは、自分じぶん一人ひとりでなかつたとみえて、お父とうさんか、お母かあさんが起おきなされたようすがしました。ランプの火ひはうす暗ぐらく、家うちの中なかを照てらしました。まだ、夜よは明あけなかつたのです。しかし、真夜中まよなかを過すぎていたことだけは、たしかでした。

そのうちに、表おもての雨戸あまどの開あく音おとがすると、

「まあ、どうして、いま時分、お帰りなされたのですか？」と、お父さんがいつていなさる声こえが聞こえました。つづいて、なにやらいつていなさるおじいさんの声こえが聞こえました。

「おじいさんだ。おじいさんが帰かえつてきなされたのだ。」と、太郎たろうはさつそく、着物きものを着きると、みんなの話はなしている茶の間ちやまから入り口ぐちの方ほうへやつてきました。

おじいさんは、朝あさ家さうちを出でたときの仕度したくと同じようすをして、しかも背せ中なかに、赤あかい大おおきなかにを背せ負おつていられました。

「おじいさん、そのかにどうしたの？」と、太郎たろうは、喜よろこんで、しきりに返事へんじをせきたてました。

「まあ、静しずかにしているのだ。」と、お父さんとうは、太郎たろうをしかつ

て、

「どうして、いまごろお帰りなされたのです。」と、おじいさんに聞いてもらいました。

「どうしたって、もう、そんなに寒くはない。なんといつても季節だ。早く出たのだが、道をまちがったのう。」と、おじいさんは、とぼとぼとした足つきで、内に入ると、仕度を解かれました。「道をまちがったって、もうじき夜が明けますよ、この夜中、どこをお歩きなされたのですか？」

父も、母も、みんなが、あきれた顔つきをしておじいさんをなぐめていました。太郎は、心の中で、おじいさんは、自分の思ったとおり、きつねにだまされたのだと思いました。

やがてみんなは、茶の間にきて、ランプの下にすわりました。すると、おじいさんはつぎのように、今日のことを物語られたのであります。

「私は、早く家へ帰ろうと思つて、あちらを出かけたが、日が短いもので、途中で日が暮れてしまった。困つたことだと思つて、ひとりどぼどぼと歩いてくると、星晴れのしたいい夜の景色で、なんといつても、もう春がじきだと思ひながら歩いていた。海辺までくると、雪も少なくて、沖の方を見れば、もう入り日の名残も消えてしまつて、暗いうちに波の打つ音が、ド、ドー、と鳴つていゝるばかりであつた。ちようど、そのとき、あちらに人間が五、六人、雪の上に火を焚いて、なにやら話をしていゝるようだった。

わたしは、いまごろ、なにをしているのだろうか、きつと魚が捕れたのになにがない。家へみやげに買っていこうと思つて、なんの気なしに、その人たちのいるそばまでいつてみると、その人たちは酒を飲んでいて。みんなは、毎日、潮風にさらされているとみえて、顔の色が、火に映つて、赤黒かつた。そして、その人たちの話していることは、すこしもわからなかつたが、私がゆくと、みんなは、私に、酒をすすめた。つい私は、二、三杯飲んだ、酒の酔いがまわると、じつにいい気持ちになつた。このぶんなら、夜じゆう歩いてもだいじょうぶだというような元気が起こつた。

わたしは、なにかみやげにする魚はないかというとき、その中の一人の男が、このかになを出してくれた。

ぜに ばら
銭を払おうといつても手を振つて、その男はどうしても金を受
け取らなかつた。私は、大がにを背中にしよつた。そして、み
なと別れて、一人で、あちらにぶらり、こちらにぶらり、千鳥
足になつて、広い野原を、星明かりで歩いてきたのだ。」と、
おじいさんは話しました。

みんなは、不思議なことがあつたものだと思ひました。

「よく星明かりで、雪道がわかりましたね。」と、太郎のお父
さんはいつて、びつくりしてました。

「おじいさん、きつときつねにばかされたのでしよう。野原の中
に、いくつもろうそくがついていなかつたかい？」と、太郎は、
おじいさんに向かつていいました。

「ろうそく？ そんなものは知らないが、思つたより明るかつた。」と、おじいさんは、にこにこ笑つて、たばこをすつていられました。

「もらったかというのは、どんなかにでしょう。」と、お母さんはいつて、あちらから、おじいさんのしよつてきたかにを、家のものいる前に持つてこられました。

見ると、それは、びっくりするほどの、大きい、真つ赤な海がにでありました。

「夜だから、いま食べないで、明日食べましょう。」と、お母さんはいわれました。

「なんという、大きなかにだ。」といつて、お父さんもびっくり

していられました。

みんなは、まだ起きるのには早いからといって、床の中に入りました。太郎は、夜が明けてから、かにを食べるのを楽しみにして、そのぶつぶつといぼのさる甲らや、太いはさみなどに気をひかれながら床の中に入りました。

明くる日になると、おじいさんは、疲れてこたつのうちにはいつていられました。太郎は、お母さんやお父さんと、おじいさんの持つて帰られたかにを食べようと、茶の間にすわっていました。お父さんは小刀でかにの足を切りました。そして、みんなが堅い皮を破つて、肉を食べようとしますと、そのかには、まったく見かけによらず、中には肉もなんにも入っていない、からっぽに

なっているやせたかにでありません。

「こんな、かにがあるだろうか？」

お父さんとうも、お母さんかあも、顔かおを見合みあわしてたまげています。太郎たろうも不思議ふしぎでたまりませんでした。

おじいさんは、たいへんに疲つかれていて、すこしぼけたようにさえ見みられたのでした。

「いったい、こんなかにがこの近きん辺べんの浜はまで捕とれるだろうか？」
お父さんとうは、考かんえながらいわれました。

海うみまでは、一里いちりばかりありました。それで、こんなかにをもらった町まちへ行って、昨夜ゆうべのことを聞きいてこようとお父さんとうはいわれました。

太郎は、お父さんにつれられて、海辺の町へいつてみることに
 なりました。二人は家から出かけました。

空は、やはり曇つていましたが、暖かな風が吹いていました。
 広い野原にさしかかったとき、

「だいぶ、雪が消えてきた。」と、お父さんはいわれました。

黒い森の姿が、だんだん雪の上に、高くのびてきました。中に
 は坊さんが、黒い法衣をきて立つているような、一本の木立も、
 遠方に見られました。

やっと、海辺の町へ着いて、魚問屋や、漁師の家へいつて
 聞いてみましたけれど、だれも、昨夜、雪の上に火を焚いていた
 というものを知りませんでした。そして、どこにもそんな大きな

かにを売っているところはなかつたのです。

「不思議なことがあればあるものだ。」と、お父さんはいいながら、頭をかしげていられました。

二人は、海辺にきてみたのです。すると波は高く、沖の方は雲切れのした空の色が青く、それに黒雲がうずを巻いていて、ものすごい暴れ模様景色でした。

「また、降りました。早く、帰ろう。」と、お父さんはいわれました。二人は、急いで、海辺の町を離れると、自分の村をさして帰ったのであります。

その日の夜から、ひどい雨風になりました。二日二晩、暖かな風が吹いて、雨が降りつづいたので、雪はおおかた消えてし

まいりました。その雨風の後は、いい天気になりました。

春が、とうとうやってきたのです。さびしい、北の国に、春がやってきました。小鳥はどこからともなく飛んできて、こずえに止まってさえずりはじめました。

庭の木立も芽ぐんで、花のつぼみは、日にまし大きくなりました。おじいさんは、やはりこたつにはいつていられました。

「あのじょうぶなおじいさんが、たいそう弱くおなりなされた。」と、家の人々はいいました。

ある日、太郎は、野原へいつてみますと、雪の消えた跡に、土筆がすいすいと幾本となく頭をのぼしていました。それを見ましたとき、太郎は、いつか雪の夜に、赤いろうそくの点っていた、

不思議な、
気味のわるい景色を思い出したのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「婦人公論」

1922（大正11）年4月

※表題は底本では、「大《おお》きなかに」となっています。

※初出時の表題は「大きな蟹」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

2013年8月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大きなかに

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>